　ダイニングではネックとノランが食事の用意をしていた。
　テーブルに四人分の食器を並べ、順番に料理を盛り付けていく。あっという間に食卓が湯気を立てる料理のいい匂いで包まれた。
「お待たせ！」
　リアムが階段を下りてくると、ネックとノランが「おっ」と表情を明るくした。
「こっちだよ」
　階段に向かってリアムが呼びかけると、おっかなびっくりノアが下りてきた。
　腰までの長い髪をサイドと後ろで結んだスリーテールにし、リアムに渡された白いブラウスとスカートを着ている。
「似合ってるじゃねえか」
　ネックが笑い、
「ダボダボじゃなくて良かったな」
　続いてノランが笑うとノアはリアムの後ろに隠れてしまった。
「こう見えて二人とも優しいから大丈夫だよ」
　リアムが優しくノアの肩に触れて、促されるように横に並んだ。
背丈はリアムとほとんど変わらないくらいだった。
「あ、こっちの青髪がネックで、おっきいのがノランだよ」
二人が「よろしくな」と言うと、ノアはネックとノランに向けて、ぺこりと頭を下げた。
「ノア」
 リアムに案内されて食卓に着くノアに、ネックが声をかけた。
 ノアは驚きで肩がびくっと上がった。
「名前、合ってるよな……？」
 恐る恐る聞くネックにノアが頷いた。
「体調はどうだ？」
「……ちょっと、頭がぼーっとするけど大丈夫」
 ノアは縮こまって答え、上目遣いでネックを見た。
「……」
 小さく口を開け、ネックの顔をまじまじと見つめた。
 心の中がざわざわしている。
「ん？」
 ネックはノアを見返し、
「どうした？」
 しかし、ノアはふるふると首を振った。
 ネックがキョトンとしていると「食べよっか」とリアムがノアの隣に座った。
 リアムが胸の前で両手を合わせる。
 ネックやノランも同じようにしているので、ノアも慌てて両手を合わせた。
「頂きます」
「頂きます！」「い、いただきます」
 ノアはしばらくぼーっと眺めていた。
「ノア、この魚、俺が獲ったんだぜ！」
 そう言うとノランが串に刺さった魚を差し出した。少しだけ焦げ目のついた焼き具合に目を奪われ口に運んだ。
「……！」
「うめえだろ？　遠慮せずにいっぱい食べろよ」
 ノアは勢いがついて他の食事に手を出し、最後にキラキラと光るスープをスプーンで掬い、口に運んだ。温かくて少し塩っぱくどこか懐かしかった。
「……」
 スプーンを置いて俯いたノアの目から、ぽろぽろと涙が溢れ始めた。
「ノア？」
 斜向かいに座っていたネックが気づき、リアムが立ち上がった。
「具合悪いの？」
 ノアは黙って首を振った。
「違うの……」
 ノアは自分でも、自分の感情を言語化できずに言葉を探した。が、やはりそれ以上の言葉が出てこなかった。
「スープが不味かったんじゃねえの？」
　ノランがリアムに吹っかける。
「そうなの？」
　ノアはそれにも首を振る。
「違うって。ノランってば勝手なこと言って」
「だってちょっと塩気が多いからさ～。味見してんのかあ？」
「なんですって！」
　ノランはリアムの導火線に火を着けてしまった。
「また始まった」と、二人の口喧嘩にネックが頬杖をついた。
　ノアがはっと顔をあげるとネックが苦笑いしていた。
「だいたいね、ノランはだらしないのよ！　いつでもどこでも服脱ぎ散らかして！」
「なにを！　この間、裁縫机つくってやった恩を忘れたのかよ！」
「ネックからも言ってよ」
「ずるいぞリアム！　ネックは俺の味方だよなあ !?」
「お、俺 !?」
「あ、あ……」
　ノアは、そんな三人のやり取りを本気で心配していた。
　だから本気で狼狽して、
「ケンカは……」
　三人は、ぴたり、と止まってノアを見た。
　そのノアが、まるで怯える小動物のように不安げな顔をしているものだから、三人は思わず、大きく笑ってしまった。
 ノアにはまだ、三人の「絆」のニュアンスがわからない。
　わからないけれど、ひとまず、三人が笑っている。
　よかった――。
 賑やかな食卓で、彼女は涙を拭きながら小さく笑った。